様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　元 年　　６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2016～2018
課題番号：１５ＫＫ００７５

研究課題名（和文）自動的な対人認知の発達に関する比較文化モデルの構築－日米の違いの検討－（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）The construction of cross-cultural model on the development of automatic person perception: Exploring differences between Japan and U.S.(Fostering Joint International Research)

研究代表者
清水　由紀（SHIMIZU, Yuki）

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０３７７００６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,300,000円
渡航期間：　14ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は，文化に固有の対人認知の個体発生的起源と伝達過程の解明を目的とする。具体的には，乳幼児期における特性推論や社会的評価の発達が，文化による影響をどのように受けるかを実験的アプローチにより検討した。
6ヶ月から4歳の乳幼児とその親を対象とした3つの研究から，文化に固有の対人認知は約3歳頃から現れることが示唆された。また，前言語期の乳児期からの親からの語りかけが，子どもが他者の行動を解釈するための足場かけ(scaffolding)となり，文化に固有の注意過程や道徳発達が伝達され得ることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多様な人々が相互作用する現代のグローバル化社会において，子どもの発達の文化的多様性を理解することは喫緊の課題と言える。しかし子どもの発達に関する比較文化的研究は，研究実施の困難さから世界的にもほとんど研究拠点がない。そのため，文化がどのように子どもの発達に影響を及ぼし得るのかについて十分に明らかにされて子なった。
本研究では，発達心理学，社会心理学，文化心理学の3つのパースペクティブを融合することにより，その知見と方法論を互いに補い，統合し，対人認知の起源とその文化的発達の過程に関する包括的モデルを提案することができた。特に，親から子どもへの文化的伝達のプロセスの一端を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to elucidate the ontogenetic origin and transmission process of culture-specific person cognition. Specifically, we examined how culture influences the development of moral inference and social evaluation in early childhood by an experimental approach.

Three studies of children aged 6 months to 4 years and their parents suggested that culture-specific person cognition appeared around 3 years of age. Also, it is suggested that the parent's child-directed speech in preverbal infancy may serve as a scaffolding for the child to interpret the other's behavior and that culture-specific attentional processes. In addition, it is considered that we established the research base of developmental research by cultural psychology approaches, which is one of the few in the world.

研究分野：発達心理学

キーワード：特性推論　社会的評価　文化　社会化　母子相互作用　乳児　幼児　道徳判断

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

多様な人々が相互作用する現代のグローバル化社会において，子どもの発達の文化的多様性を理解することは喫緊の課題と言える。近年，心理学における WEIRD (Western, Educated, Industrialized, Rich, and Democratic)サンプルへの極端な偏りについて指摘されており(Henrich, Heine, & Norenzayan, 2010)，発達心理学においても，これまでの子どもの発達に関する知見が極めて狭いサンプルにもとづくものであるという認識は広まってきている(Damon, 2011)。子どもの発達と文化の相互作用に関する検討は，これまで主に生態学的システム論(e.g., Bronfenbrenner, 1979,1986)や文化－歴史的アプローチ(e.g., Cole, 1996; Rogoff, 2003) により試みられてきた。しかし過去約 20 年間で，発達心理学と文化心理学は互いの影響をより大きく受けるようになり，双方が統合した比較文化発達科学への道が切り開かれつつある(Mistry & Dutta 2013)。しかし，文化心理学的パースペクティブを採り入れた発達研究は，依然として少ないのが現状である。

特に，他者の特性についての判断は，人にとって重要な側面である。なぜなら，自身に危害を与えうる存在とそうでない存在を区別することは，自らの生存に関わる可能性があるからである。しかしそのような他者についての判断の発達に，文化がどう影響を与えているのかについてはこれまでほとんど明らかにされていない。特に，乳幼児期における文化固有の道徳判断の出現および，社会化における文化的な伝達プロセスはほとんど検討されていない。

２．研究の目的

本研究では，対人認知の発達に関して，文化の影響はいつからどのように現れるかという個体発生的な「起源」，および文化はどのように子どもに伝えられるかという「過程」に迫ることを目的とした。具体的には，「リサーチ・クエスチョン 1：いつ，どのように，文化に固有の対人認知が現れるのか？」および「リサーチ・クエスチョン 2：文化の伝達は，どのように行われるのか？」について検討した。1 点目に関しては，6 ヶ月から 4 歳までの乳幼児を対象として，文化に固有の対人認知の特徴がいつ，どのように現れるのかについて検討した。2 点目に関しては，発達初期から，主に家庭内での相互作用の中で，文化的な価値観や枠組みがどのように伝えられていくのかについて，母親の子どもに向けた語りが子どもの対人認知とどう関連するのかについて検討した。

研究実施に当たっては，発達心理学，社会心理学，文化心理学の専門家による共同研究プロジェクトを立ち上げ，3 つのパースペクティブを融合することにより，その知見と方法論を互いに補い，統合し，対人認知の起源とその文化的発達の過程に関する包括的モデルを提案することを目指した。

３．研究の方法

(1)研究 1

①参加者：6-18 ヶ月児とその母親，計 159 組（日本人 86 組，ヨーロッパ系アメリカ人 73 組）。

②手続き・材料：一組ずつ日米それぞれの実験室に来てもらい，次の手続きにて実験を行った。

子どもの特性推論：ぬいぐるみが社会的相互作用をしているビデオを PC モニターにより見てもらい，子どもが向社会的な行動と反社会的な行動を交互に見せた。馴化するまで見せた後，異なる場目における相互作用を見せた。また向社会的な特性のぬいぐるみと反社会的な特性のぬいぐるみを子どもの前に見せて，どちらにリーチングするかを調べた。

母親による他者についての語り：母親に上記のビデオを子どもと一緒に視聴してもらい，子どもに自由に話しかけてもらった。データは，社会的な評価語・特性に言及したかどうかの観点から分析した。

(2)研究 2

①参加者：乳児をもつ母親 120 名。日本人 60 名，ヨーロッパ系アメリカ人 60 名。

②手続き：個別にインタビューを行った。自身の子どもについて，どのような子かを自由に語ってもらった。回答は，身体的特性，社会的特性，好み，活動，性格，（子どもの発達や特性に関する）母親の感情，その他のカテゴリーに分類した。また質問紙により 2 つの育児観尺度に回答してもらった。

(3)研究 3

①参加者：3-4 歳児計 142 名。日本人 78 名，ヨーロッパ系アメリカ人 63 名。

②手続き・材料：子どもに一人ずつ実験室に来てもらい，行動（向社会的・反社会的）×結果（相手が喜ぶ，悲しむ，ニュートラル）の 6 種類の物語をナレーション付きで視聴してもらった。提示中の子どもの注視行動をアイトラッカーにより計測した。その後，行為者の道徳的特性（親切，意地悪）について評価してもらった。

４．研究成果

3 つの研究から，次のことが明らかになった。

(1)日米いずれにおいても，15-18 ヶ月で向社会的人物への選好が見られた。したがって，乳児期の（原始的な）道徳判断の出現は，文化間で類似している可能性が示唆された(Figure 1)。

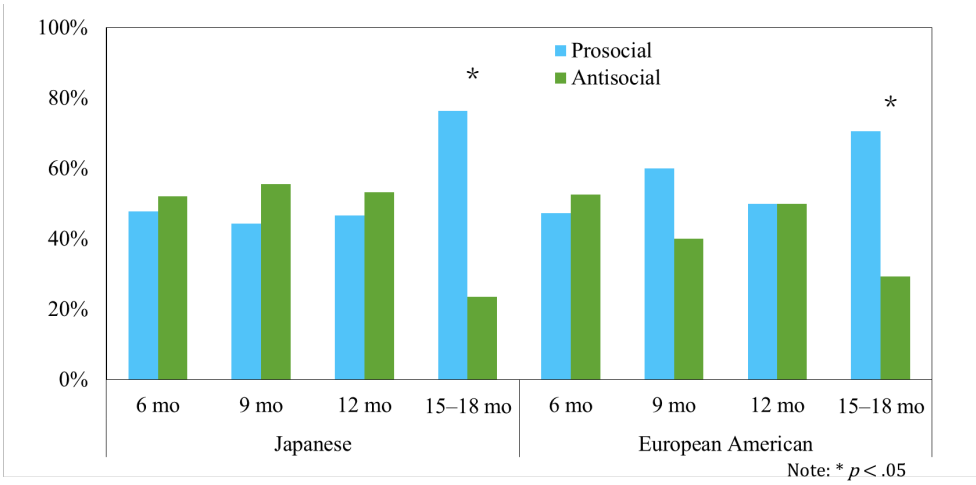

Figure 1 日米の乳児の向社会的人物への選好 (Shimizu, Senzaki, & Uleman, 2018)

(2)母親による道徳的評価語の使用が，乳児の向社会的人物への選好を予測した。したがって，乳児期の道徳判断の発達には親による社会化が影響することが示唆された。

(3)日本とアメリカの乳児の母親では，道徳的評価語の使用頻度が異なっていた。よって，乳児は前言語期から，文化に固有のディスコースにさらされていることが明らかになった。

(4) 3-4 歳の幼児において，行動の結果（相手の情動的反応）への敏感性は，日米で差がない。

(5)しかし言語評価においてのみ文化差があり，アメリカの子どもの方が日本の子どもよりも早く発達することが示唆された (Figure 2)。

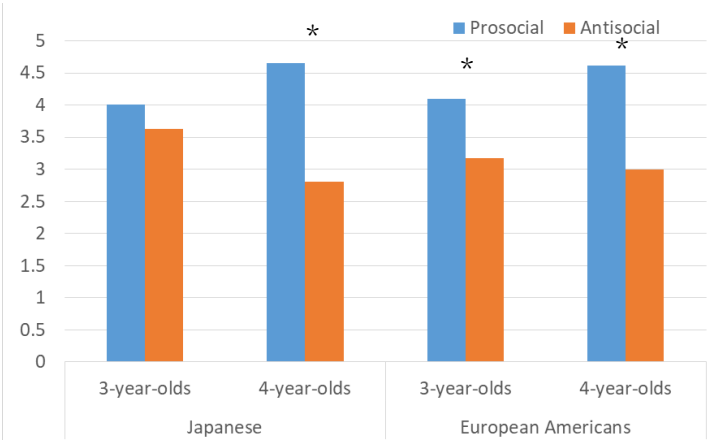

Figure 2 日米の幼児の言語的道徳判断 (Shimizu, Senzaki, & Cowell, under review)

※なお(1)〜(3)の成果は, Shimizu, Senzaki, & Uleman (2018)として Infancy という国際雑誌に掲載された。(4)(5)の成果は，国際雑誌に投稿し現在審査中である。

以上より，1 つ目のリサーチクエスチョン「いつ，どのように，文化に固有の対人認知が現れるのか？」に関して，約 3 歳頃から見られることが示唆された。2 つ目のリサーチクエスチョン「文化の伝達は，どのように行われるのか？」に関しては，前言語期の乳児期からの親からの語りかけが，子どもが他者の行動を解釈するための足場かけ(scaffolding)となり，文化に固有の注意過程や道徳発達が伝達され得ることが示唆された。

さらには, 日本国内における比較文化アプローチによる発達研究のさらなる進展を目的とし，日本発達心理学会第 30 回大会において「社会的認知発達における比較文化研究の現在」というシンポジウムを企画し開催した。これらの取り組みにより，文化心理学的アプローチによる発達研究が世界的に少ない中で，その研究拠点を本国において構築することができたと考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者は下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

(1)清水由紀 (2019) **子どもの人生で「信頼感」が育まれていく過程**. ***児童心理***, *73*, 3 **月号**, 10-17. **金子書房**. **査読無**

(2)Senzaki, S., Wiebe, S. A., Masuda, T., & Shimizu, Y. (2018). A cross-cultural examination of selective attention in Canada and Japan: The role of social context. *Cognitive Development*, *48*, 32-41. doi.org/10.1016/j.cogdev.2018.06.005 **査読有**

(3)Shimizu, Y., Senzaki, S., & Uleman, J. S. (2018). The influence of maternal socialization on infants' social evaluation in two cultures. *Infancy*, *23(5)*, 748-766. doi:10.1111/infa.12240 **査読有**

(4)Uleman, J. S., Granot, Y., & Shimizu, Y. (2018). Responsibility: Cognitive fragments and collaborative coherence? *Behavioral and Brain Sciences*, *41*, E60. doi:10.1017/S0140525X17000814 **査読有**

(5)清水由紀 (2018) **コミュニケーションの中で育つ言葉**. **幼児教育じほう**, 9 **月号**, 12-18. **全国国公立幼稚園・子ども園長会事務局時報部**. **査読無**

(6)清水由紀 (2018) **発達段階からみたいじめ**. ***児童心理***, *72*, 5 **月号**, 11-17.**金子書房**. **査読無**

(7)Lee, H., Nand, K., Shimizu, Y., Takada, A., Kodama, M., & Masuda, T. (2017). Culture and emotion perception: Comparing Canadian and Japanese children's and parents' context sensitivity. *Culture and Brain*, *5*, 91-104. doi:10.1007/s40167-017-0052-0 **査読有**

(8)Shimizu, Y. (2017). Why are negative behaviours likely to be immediately invoked traits? The effects of valence and frequency on spontaneous trait inferences. *Asian Journal of Social Psychology*, *20*, 201-210. doi:10.1111/ajsp.12183 **査読有**

(9)Lee, H., Shimizu, Y., Masuda, T., & Uleman, J. S. (2017). Cultural differences in spontaneous trait and situation inferences. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *48*, 627-643. doi:10.1177/0022022117699279 **査読有**

(10)Shimizu, Y., Lee, H., & Uleman, J.S. (2017). Culture as automatic processes for making meaning: Spontaneous trait inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, *69*, 79-85. doi:10.1016/j.jesp.2016.08.003 **査読有**

(11)清水由紀 (2017) **相手を思いやる心の発達**. ***児童心理***, *71*, 7 **月号**, 11-18.**金子書房**. **査読無**

〔学会発表〕（計 16 件）

(1)**北田沙也加・清水由紀**(2019) **幼児期における乳児への関心と養育的行動との関連**. **日本発達心理学会第** 30 **回大会**

(2)清水由紀 (2019) **道徳判断の発達と文化： 日米の乳幼児を対象とした注意過程・言語報告の比較**. **日本発達心理学会第** 30 **回大会自主シンポジウム「社会的認知発達における比較文化研究の現在」**

(3)清水由紀・James S. Uleman (2018) **行動観察時における人物と状況への注意の文化差－アイトラッキングによる自発的推論のプロセスの検討－**. **日本心理学会第** 82 **回大会**

(4)**北田沙也加・清水由紀** (2018) **幼児の乳児選好が乳児への養育的行動に及ぼす影響**. **日本心理学会第** 82 **回大会**

(5)**北田沙也加・清水由紀** (2018) **幼児期における乳児顔への選好注視**. **日本発達心理学会第** 29 **回大会**

(6)Shimizu, Y., Senzaki, S., & Uleman, J. S. (2018) Spontaneous impressions: Cultural, automatic, and developmental effects. Presented in the Symposium "New evidence on forming and changing first impressions of others". *19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology*

(7)Kitada, S. & Shimizu, Y. (2018) Young children's selective attention to babies: Eye-tracking study in Japanese nurseries. *25th Biennial ISSBD (International Society for the Study of Behavioural Development) Meeting*

(8)Shimizu, Y., Lee, H., & Uleman, J. S. (2018) Culture as automatic processes for making meaning: spontaneous trait inferences. *19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology*

(9)Senzaki, S. & Shimizu, Y. (2018) Longitudinal effect of parental values of self-concepts on an early emergence of cross-cultural differences in personality development. *19th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology*

(10)Shimizu, Y. & Senzaki, S. (2017) The role of culture in infants' social attributions and mothers' social explanations. *Biennial Meeting of Society for Research in Child Development*

(11)Senzaki, S. & Shimizu, Y. (2016) Cross-Cultural Examination of Parents' Expectations for Their Children's Development of Self. Paper Session. *The 23rd Congress of IACCP (International Association for Cross-Cultural Psychology)*

(12)Shimizu, Y. & Senzaki, S. (2016) The role of culture in Japanese and American mothers' social explanations. Presented in the Contributed Symposium "Cognitive development across cultures: The role of parent-child interaction in cultural transmission". *The 31st International Congress of Psychology*

(13)Senzaki, S., & Shimizu, Y. (2016) Story Time Reflects Cross-Cultural Differences in Attentional Patterns in Infancy. Presented in the Contributed Symposium "Cognitive development across cultures: The role of parent-child interaction in cultural transmission". *The 31st International Congress of Psychology*

(14)Davis, B.R. & Shimizu, Y. (2016) Beliefs about and attitudes toward same-sex desiring men: A culturally-informed experimental mapping method in Japan and the United States. Oral Presentation. *The 31st International Congress of Psychology*

(15)Ota, H. & Shimizu, Y. (2016) Is mother's question in speech a predictor of infants' perception of intonation? Poster presentation. *The 31st International Congress of Psychology*, Yokohama, Japan.

(16)Davis, B.R., & Shimizu, Y. (2016) Mapping the sexual other: A cultural analysis of beliefs about male same-sex sexuality in Japan and the U.S.. *The 7th Annual All Psychology Doctoral Student Research Day*, City University of New York.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

研究協力者

〔主たる渡航先の主たる海外共同研究者〕
研究協力者氏名：Dr. ULEMAN, James S.

ローマ字氏名：Dr. ULEMAN, James S.

所属研究機関名：New York University

部局名：Department of Psychology

職名：Professor

研究協力者氏名：先崎紗和

ローマ字氏名：Dr. SENZAKI, Sawa

所属研究機関名：University of Wisconsin – Green Bay

部局名：Department of Human Development

職名：Associate Professor

〔その他の研究協力者〕
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。